

第2章 益田氏城館跡を取り巻く環境

2-1 自然的環境

2-1-1 位置

益田市は島根県の西端部に位置し、南は津和野町と吉賀町、東は浜田市、南東は広島県、西は山口県と接している。平成16(2004)年11月1日に、益田市・美都町・匹見町が合併し、新市域の総面積が島根県内で最大の733.19km²となった。

高津川と益田川によって形成された石見地方最大の沖積平野を中心に市街地が広がり、古くから山陽と山陰を結ぶ交通の要衝地として栄えてきた人口47,200人の市である。

中世には国人領主益田氏が本拠地とした。益田氏は平安時代末に益田に移り、関ヶ原の戦いの後、長門国須佐(山口県萩市)に移るまでの約400年間にわたりこの地を治めた。

益田氏城館跡は、市域の北部中央に位置し、益田氏の居館である三宅御土居跡と、居城の七尾城跡からなる。三宅御土居跡は益田川右岸に立地する平地居館跡で、益田川対岸の丘陵上に山城の七尾城跡がある。益田川河口からは約5km上流に位置する。七尾城跡の本丸からは、かつての城下のまち並みと日本海を広く眺望することができる。



図 2-1 益田市の位置

2-1-2 地勢

益田市は、北は日本海を臨み、南は中国山地に連なる。市域の南東から南西にかけての広島県との県境に沿って、島根県最高峰の恐羅漢山(1,346m)、寂地山(1,337m)、安蔵寺山(1,268m)など中国山地の脊梁部を形成する標高1,000m級の山々に囲まれている。

中国山地を源流とする一級河川高津川と二級河川益田川が市北部の益田平野を流れて日本海に注ぐ。益田平野は2本の河川による複合三角州及び扇状地と、砂丘に覆われた海岸砂州で構成された沖積平野である。高津川河口付近の左岸には標高50~60mの丘陵地が広がり、蟠竜湖は海岸からの飛砂で形成された砂丘が谷の出口を塞いだことによってできた堰止湖である。益田市の海岸線は、東端の浜田市境と西端の山口県境周辺では磯が見られるものの、それ以外は砂浜が長く続く。

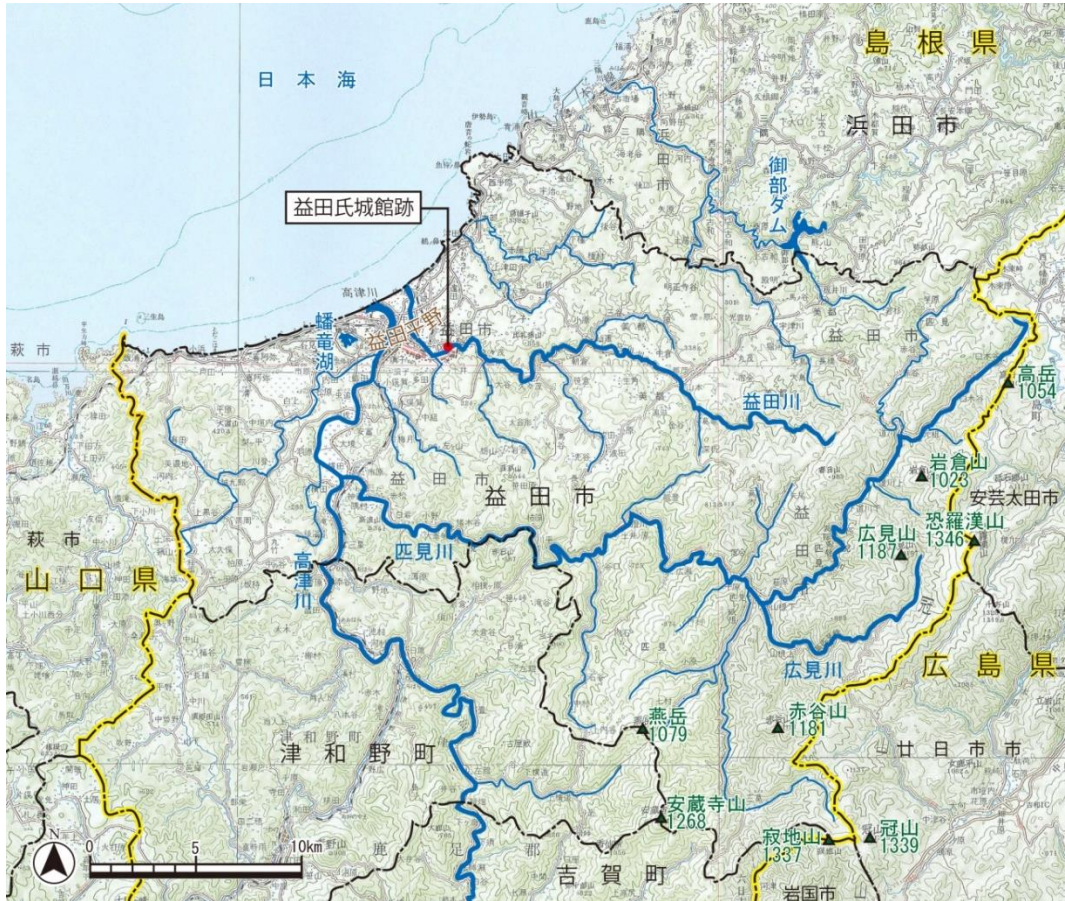


図2-2 地形水系図

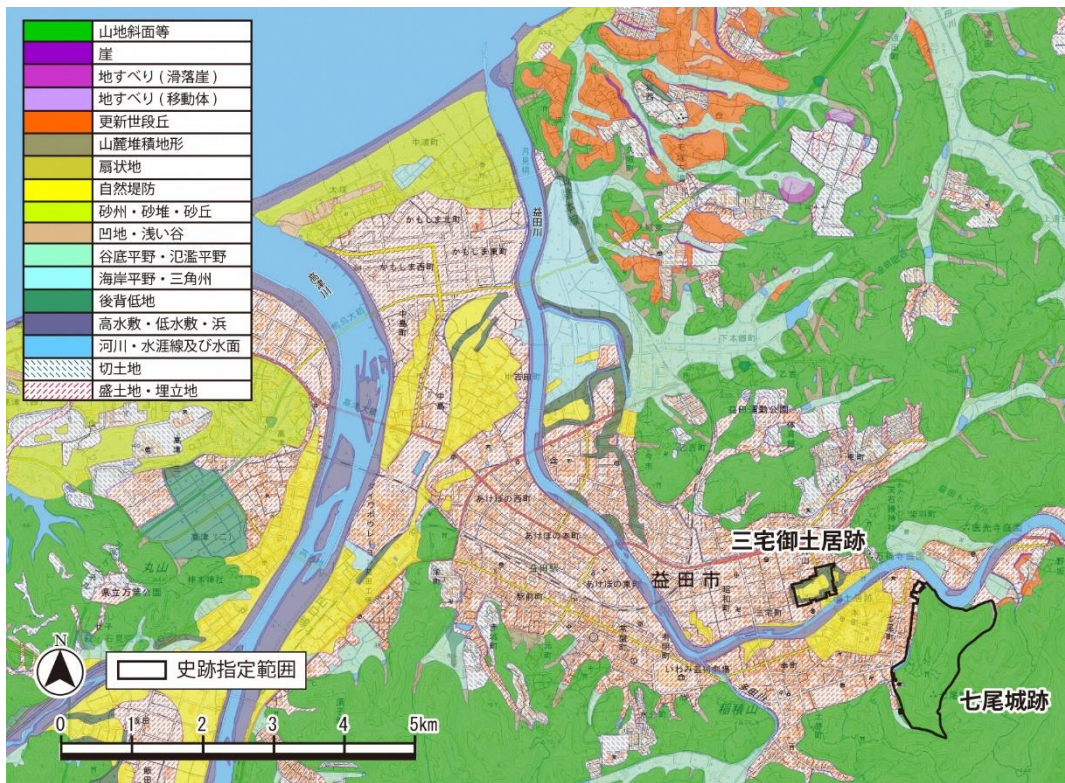


図2-3 土地条件図

(国土地理院発行の数値地図25000(土地条件)を使用)

2-1-3 気象

益田市は日本海を流れる対馬海流の影響を受け、冬でも最低気温が0℃を下回ることはい少ない温暖な地域である。近年の暖冬の影響により山間部でも年々積雪量は少なくなってきた。

平成29(2017)年の年間平均気温16.0℃、年間降水量は1,423.0mmである。

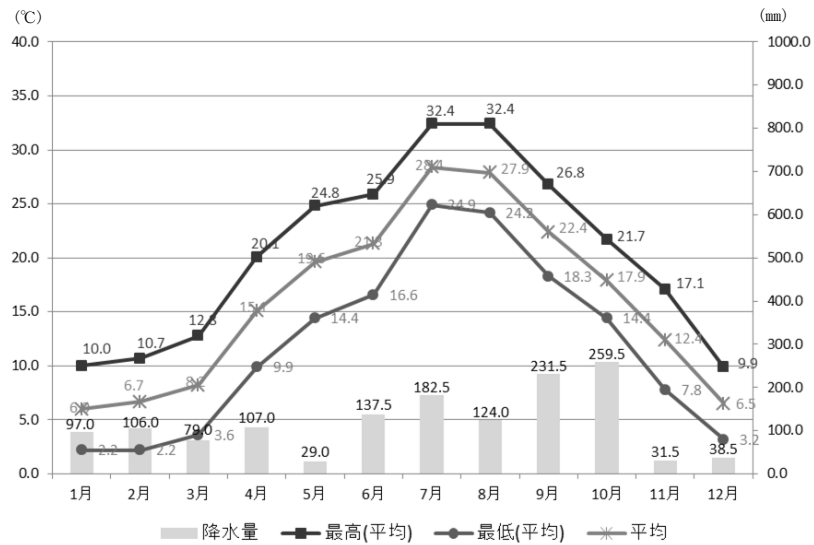


図 2-4 平成 29 (2017) 年気温、降水量グラフ (松江地方気象台データ)

2-2 歴史的環境

2-2-1 益田市域の歴史

益田の黎明

山間部の新榎原遺跡(匹見町道川・県史跡)では旧石器時代の石器が、海岸部近くの久城西Ⅱ遺跡(久城町)や堂ノ上遺跡(久城町)では縄文時代草創期が下限と推定される石器が発見されるなど、古くから人の営みがあった。特に、匹見町には縄文時代早期以降の狩猟・採集・漁労を基盤とした集落遺跡が濃密に分布する。上ノ原遺跡(匹見町匹見・市史跡)やダヤ前遺跡(匹見町道川)では縄文時代早期の石器や土器が確認され、前期の中ノ坪遺跡(匹見町紙祖・市史跡)や中期の石ヶ坪遺跡(匹見町紙祖・市史跡)から出土した九州系土器からは遠隔地間の活発な交流がうかがえる。縄文時代後期になると石ヶ坪遺跡、水田ノ上遺跡(匹見町紙祖・市史跡)、ヨレ遺跡・イセ遺跡(匹見町匹見・市史跡)で配石遺構が確認され、葬送儀礼を含めた宗教的な儀式も行われていた。中国山地を縦断する断層谷や南北方向に流れる河川の谷が主要な交通路を形成し、広域的な文化交流の要衝地として拠点的な集落が複数形成されていったと考えられる。

海岸部にあつては、瀉湖中の微高地や低丘陵に狩猟・漁労を営む採集民集落が出現する。久城丘陵上の若葉台遺跡(久城町)からは縄文時代後期前葉の縄文土器が出土し、沖手遺跡(久城町)では後期末～晩期初頭の丸木舟が発見されている。土井後遺跡(三宅町)の地に、最初の人々の居住が見られるのは縄文時代晩期のことである。

益田川流域においては、酒屋原遺跡(美都町仙道)、唐干田遺跡(美都町都茂)や本郷遺跡(美都町二川)で後・晩期の縄文土器が出土している。また、高津川流域では、後・晩期の代表的な遺跡として安富王子台遺跡(安富町)がある。

弥生時代には稲作が始まり、環濠集落や高地性集落も営まれ、弥生時代後期にかけて多

くの堅穴住居^{たてあなじゅうきょ}を有する広く安定的な集落へと展開していった。浜寄・地方遺跡^{はまより じかた}(高津町)では、高津川沿いの自然堤防の後背湿地^{こうはいしつち}に営まれていた弥生時代前期の水田が検出された。浜寄・地方遺跡では弥生から中世までの各時代の遺物が相当量出土しており、高津川河口部で長期にわたって存続した拠点的な集落と考えられる。益田平野中央部の沖手遺跡においても前期の弥生土器が少量ながら出土し、初期の農耕集落が存在した可能性がある。中期以降、久城丘陵西端の専光寺脇遺跡^{せんこう じわき}(久城町)で貼石墳丘墓^{はりいしふんきゅうぼ}が発見され、後期の堂ノ上遺跡(久城町)では大規模な堅穴住居群が確認されるなど、益田川河口部一帯の集落をまとめる小首長の台頭を示している。

高津川中流域の安富地区では、集落域を区画する溝をもつ弥生中期の羽場遺跡^{はば}(安富町)や多数の住居跡が重なり合っ^{なかしようじ}て見つかった弥生後期の大规模集落である中小路遺跡(安富町)がある。西部瀬戸内系の弥生土器が多数出土しており、縄文時代から引き続いて広域にわたる交流が行われていたことを物語っている。

有力な首長^{しゅちよう}の登場と古墳

古墳時代になると、益田川以東の益田平野周辺に古墳が造られ始め、しかも前期から後期を通じて継続して築造される。市内最古の古墳である四塚山古墳^{よつづかやま}(下本郷町^{しもほんごうちよう})は、日本海まで一望できる丘陵上に位置し、団地造成中に三角縁神獸鏡^{さんかくぶしんじゅうきよう}が発見されたことから、古墳時代前期に位置付けられている。その後^{おおもと}に築かれた大元1号墳^{とくだちよう}(遠田町・県史跡)は、全長約85mの前方後円墳^{ぜんぽうこうえんふん}で、石見地方最大の規模を誇る。発掘調査の結果、古墳の表面を覆っていた葺石や、墳丘上に立て並べられた埴輪^{はにわ}が多数出土し、畿内の埴輪製作技術の直接的な影響を受けた埴輪も認められる。古墳時代中期には、スクモ塚古墳(久城町・国史跡)が築造された。直径約53mの造り出し付円墳として指定されたが、近年の測量調査により、全長100mの前方後円墳である可能性が指摘されている。古墳時代後期に築造された小丸山古墳^{こまるやま}(乙吉町^{おとよしちよう}・市史跡)は、全長約52mの前方後円墳で、周囲に周溝と周堤^{しゅうこう しゅうてい}を備えており、このような形態の古墳は石見地域で唯一のものである。また、副葬品^{ふくそうひん}として馬具や須恵器が出土している。このように、益田平野とその周辺部では、首長の系譜を引くと考えられる大型古墳が継続的に築造されており、古墳時代の益田地域がヤマト政権による日本海沿岸地域支配の西の拠点にあたる^{くしるにし}ことが、その背景の一つに挙げられる。

一方、台頭してきた有力者層も鵜の鼻古墳群^{うのはな}(遠田町・県史跡)、白上古墳^{しらがみ}(白上町^{しらがみちよう}・市史跡)、片山横穴群^{かたやまよこあなぐん}(東町^{ひがしまち})、北長迫横穴群^{きたながさこあなぐん}(赤城町^{あかぎちよう})などの墳墓^{ふんぼ}、群集墳^{ぐんしゅうふん}、横穴群を造営した。山間地においても三谷1号古墳・2号古墳(美都町三谷^{みたに}・市史跡)、江田古墳^{えだ}・和田古墳^{わだ}(匹見町^{ひきみ}・市史跡)などが築造された。

なお、古墳時代中期から後期にかけての集落跡が若葉台遺跡、久城西Ⅰ遺跡(いずれも久城町)で発見され、有力な古墳群が築造された背景が明らかになりつつある。

古代の益田

奈良時代には、現在の島根県の西半に石見国^{いわみのくに}が置かれ、益田市域はほぼ石見国美濃郡に相当する。石見国府は、益田市に隣接する現浜田市に置かれた。美濃郡^{みのぐん}の位置は特定されていない。中小路遺跡では直径1mに及ぶ柱穴群が検出され、官衙^{かんが}に関わる建物とも推測

されており、益田川中流域の酒屋原遺跡(美都町仙道)においても円面硯などが出土し、官衛的な性格を有する遺跡と考えられている。また、中世益田氏の居館が置かれた三宅(三宅町)を「屯倉」と想定する説もある。

この時期、市域東部の海岸部に近い丘陵斜面上などには、須恵器窯が築かれた。本片子窯跡(津田町)では須恵器の坏や壺類のほか、丸瓦・平瓦も焼成されており、未だ発見されていないものの、古代寺院や官衛の存在が推測される。

平安時代の「延喜式神名帳」には旧美濃郡内で五社がみえるほか、益田川河口部には寺名に「福」の字の入る5つの寺院(通称：五福寺)があり、万寿3(1026)年の大地震による津波により流失したという伝説がある。現存する中須町の福王寺と東町の万福寺は、これらの後身の寺院(万福寺は中須の安福寺を移したもの)といわれる。『日本三代実録』には、元慶5(881)年に都茂郷丸山で銅山が発見されたとの記載がある。

また、本市は飛鳥時代の歌人、柿本人麿にまつわる伝承が多く残る。戸田の柿本神社は、人麿の生誕地に建てられたといわれ、代々語部(歴史や神話を口伝する職務にあった人)であった綾部家が神社の神官を務めてきた。人麿は大宝元(701)年以降に石見国府に赴任し、久城沖にあった鴨島の地で生涯を終えたといわれる。没後、聖武天皇の勅命によって、鴨島に人麿を祀る社殿が建てられたが、前述の津波で島は水没したと伝わる。ご神体が漂着した高津松崎に社殿を再建し、天和元(1681)年に津和野藩主亀井茲親によって現在地に移築された。

中世の益田

平安時代末には、益田荘と長野荘が成立し、美濃郡内のほとんどの地域が荘園となった。貞応2(1223)年の土地台帳によると、鎌倉時代の益田は大半が益田荘と長野荘で占められ、国衙領は足見別符、丸毛別符、津毛別符の3箇所が存在するだけであった。益田荘は本郷、納田郷、井村郷、乙吉郷、弥富名からなり、摂関家の藤原忠通が石見国の知行国主であった平安末期に成立したと考えられ、その後、摂関九条家に伝えられ、園城寺の円満院門跡も支配に関与した。長野荘の成立時期は不明であるが、建長8(1256)年には、崇徳天皇の御影堂領であることが確認できる。益田荘・長野荘ともに、天皇家、摂関家、門跡寺院という有力な荘園領主の支配下にあった。

一方、平安時代末に石見国司として藤原(御神本)国兼が赴任し、その後、兼高が益田に本拠を移して益田氏を名乗るようになったといわれている。中世の益田は、石見国を代表する有力武士団へと成長した益田氏がこの地を本拠としたことから大きく発展した。なかでも益田本郷地域には、益田氏の城館跡である三宅御土居跡と七尾城跡等の中世遺跡や、地割、地名、寺社、石造物が数多く残り、市域全体にも中世遺跡が点在する。さらに益田家には、山陰地方では質・量ともに随一とされる文書群と貴重な美術工芸品が伝来した。

益田本郷に位置する医光寺は、もと天台宗崇観寺の塔頭として貞治2(1363)年に創建された臨濟宗の寺院で、境内には国史跡及び名勝に指定された伝雪舟庭園がある。万福寺は、万寿年間(1024～1027)に流失したとされる天台宗安福寺(中須町)を、兼見が応安7(1374)年に移転再建した寺院で、国重要文化財の本堂、国史跡及び名勝の伝雪舟庭園がある。妙義

寺の創建は文永年間(1264～1274)と伝わる。益田藤兼はこの寺を特に重視し、たびたび寺領を寄進し、末寺は15を数えた。門前には七尾城の堀・丸池からの川跡が残る。延喜式内社の染羽天石勝神社は、奈良時代の神亀年間(724～729)に創建されたという。天正9(1581)年に焼失したため、藤兼・元祥父子により再建された。その別当寺として勝達寺が創建され、中世初期には十六坊を構え繁栄したが、明治の廃仏毀釈により廃寺となった。七尾山中腹の住吉神社は、兼高が上府(現在の浜田市)の住吉社を七尾城の鎮護神として奉祭したことに始まるという。現在の社殿は、寛文4(1664)年に浜田藩主松平氏によって造営された。

七尾城下町には、防御のための遺構と考えられる暁音寺門前の鍵曲がりや、道に面して連続して並ぶ短冊状の地割、「上市」、「中市」、「下市」、「上犬ノ馬場」、「下犬ノ馬場」の地名等がみえ、中世の名残をとどめている。また、城下には総高210cmを測る市内最大の五輪塔である妙義寺桜谷五輪塔(伝益田藤兼墓)をはじめ、数多くの花崗岩製の中世石造物が確認されている。

高津川・益田川下流域では、縄文時代前期に久城から中須、大塚にかけての海岸に砂州が形成され始め、次第に砂丘帯へと発達し、外海と隔てられた潟湖を形成した。その後、潟湖は河川上流からの土砂の流入などにより、次第に規模を狭め、陸地・平野化していくが、一方で益田平野内の高津川・益田川の流路は複雑に蛇行・分流し、氾濫にもなって河道の位置はしばしば変化したと考えられる。そして、中世になると、河川やそこにつながる入江地形といった潟湖的水域の縁辺部などに港湾集落が相次いで出現した。

沖手遺跡(久城町)は、その中でいち早く成立した港湾集落で、道路を骨格として集落全体の地割が行われ、これに沿って掘立柱建物や井戸、墓等の遺構が検出されている。続く中須東原遺跡・中須西原遺跡(中須町)でも方形の街区が形成され、多数の鍛冶関連遺構のほか、町屋や倉庫跡と思われる建物の柱穴が多数検出されている。最盛期には南面の旧河道あるいは潟湖的な水域に沿って舟着場・荷揚げ場と考えられる礫敷きが築かれた。沖手遺跡から中須東原・西原遺跡へと変遷した港湾施設の機能は、さらに上流の今市(乙吉町)へと移った。益田本郷市に対する新たな市町として成立した中世今市遺跡は、16世紀前半に造成が始まり、16世紀末に最盛期を迎えた後、17世紀後半から次第に土砂の堆積が進み、下流の「下四反田」に荷揚げ場が移動するまで存続した。中央の道と両側の短冊状区画を含む今市の地割全体が今も残る。

これらの港湾遺跡は、西日本海を通じた国内外の遠隔地と益田本郷・三宅御土居・七尾城、さらに内陸の都茂鉦山や匹見の山間地域などにつながる結節点として、中世の益田地域における人々の活動と繁栄を支えた。

高津川の中流域では、市域の南西部、横田町の山頂に建立された石塔寺大権現は、『日本三代実録』元慶2(878)年の条に「石見国石塔鬼王帝釈天王国社神並授従五位下」とみえる。宝永3(1706)年に境内から9口の経筒が発見され、うち越州窯系青磁経筒1、褐釉四耳壺3、須恵質壺1の5口が県有形文化財に指定されている。羽場遺跡(安富町)でも、緑釉陶器や12世紀以降の陶磁器が大量に出土した。高津川支流の上流域にあたる匹見では、石見、安芸、周防を結ぶ要衝地を支配した在地領主の館跡と推定される殿屋敷遺跡(匹見町紙祖)、青白磁梅瓶や12世紀後半と推定される和鏡の出土から在地有力者の館跡と推定される山根ノ下

遺跡(匹見町澄川)、そのほか要所に山城が築かれている。

北条氏が石見国守護となり、益田本郷が一時的に益田氏の手を離れていた鎌倉時代後期には、益田惣領家及び益田氏一族は、益田川上流の「山道」地域(美都町仙道)を本拠にしたと推定されている。一帯では、中国製青磁碗、白磁小皿、湖州鏡等が副葬された墓地の粟島原遺跡(美都町小原)、館推定地の一面から日引石製(福井県産)宝篋印塔とともに褐釉四耳壺、常滑系壺等を骨蔵器とした集石墓が発見された東仙道士居遺跡(美都町仙道)、円面硯等と豊富な中世陶磁器が出土し、古代の行政関連施設から在地領主の拠点施設に変遷した酒屋原遺跡(美都町仙道)、緑釉陶器等が出土した下都茂原遺跡(美都町仙道)など中世遺跡の発見が相次いでいる。さらに、上流域の都茂では都茂鉦山の近くで中世の銅精錬工房跡が発見された大年ノ元遺跡(美都町山本)が、丸茂では有力在地領主の館と推定される森下遺跡(美都町丸茂)が発見されている。

益田の近世

慶長5(1600)年、関ヶ原の戦いで西軍が敗北すると、西軍の総大将であった毛利氏は周防・長門(山口県)の2か国に減封された。元祥は、大名にするという徳川家からの誘いを断って益田の地を離れ、長門国須佐(山口県萩市)へ移り、益田市域は幕府領と津和野藩領及び浜田藩領となった。幕府領の村々は元和年間(1615～1623)にはほとんどが津和野藩領と浜田藩領に編成され、津和野藩では寛永14(1637)年、浜田藩では明暦4(1658)年に詳細な検地が行われて地方支配の基礎とされた。益田平野の旧河道は新田として開発され、高津村沖田の荒地も蟠竜湖から水を引き美田となった。

津和野藩・浜田藩はともに製蠶・製紙を奨励した。匹見地域や美都地域では山林資源が豊富なことから鑪場が多く、井野村(現浜田市三隅町)から砂鉄を運んで経営され、製品は加計(現広島県安芸太田町加計)や益田へ搬出された。匹見川では鮎漁も盛んに行われた。都茂鉦山は大森代官所(現大田市)の支配下で採掘されていたが、採掘量が減ると天保13(1842)年に浜田藩の管理下となった。幕末、第二次幕長戦争では石州口の益田で激戦があり、慶応2(1866)年には長州軍が幕府軍を破って浜田藩領に進攻し、明治2(1869)年まで幕府領と浜田藩領は長州藩が支配した。

近現代の益田

明治2(1869)年の版籍奉還により津和野藩主が藩知事に任命され、津和野藩以外の石見国は大森県となった。大森県は翌明治3(1870)年に浜田県と改称、さらに明治4(1871)年には津和野藩が廃されて浜田県となり、明治9(1876)年には第二次府県統合により島根県に合併された。

明治22(1889)年の町村制施行により、益田地域で1町14村、美都地域で3村、匹見地域で3村が成立した。昭和27(1952)年には益田町を中心として益田市が誕生し、昭和の大合併により市域を拡大、美都地域・匹見地域においてもそれぞれ3村が合併して、昭和31(1956)年には匹見町、昭和32(1957)年には美都町が誕生した。

明治20(1887)年頃から都茂鉦山の稼働が再開され、昭和62(1987)年に全面閉山した。大正12(1923)年には山口線・山陰本線がそれぞれ益田まで開通し、石見益田駅が開業した。鉄

道の枕木需要から山間部では製材業が栄え、匹見川を利用して搬出された。また、大正15(1926)年に匹見町から益田へ架設された総延長29.9kmの索道が、馬車で2日を要した距離を5時間で結んだ。1日平均38トンの物資が搬出され、途中8カ所の駅もあったが、奥部への道路網整備が進み、自動車輸送が発達すると昭和26(1951)年に全線廃止された。明治22(1889)年には山陰道が改修され、同26(1893)年から益田川沿いに整備が進められていた往来道は大正12(1923)年には県道とされ、昭和39(1964)年には国道191号に昇格し、昭和30(1955)年以降、国道9号、国道191号のバイパスが建設された。経済活動の中心が益田駅付近に移行するにつれて吉田地区が発展し、昭和40(1965)年代以降は商業団地の造成、大型店や諸官庁の進出などによって急速に都市化が進んだ。その後、運動公園や陸上競技場などの体育施設、雪舟の郷記念館、柿本神社(高津町)を取り込んだ万葉公園など文化施設の整備も進められ、平成5(1993)年には石見空港が開港し、東京や大阪との時間的距離を短縮した。

益田市の歴史を活かしたまちづくり

一方、昭和38(1963)年の豪雪は、山間部では拳家離村が多発するなど、過疎の引き金となったとされる。益田市は、昭和58(1983)年7月の山陰豪雨災害に見舞われ、大きな被害を受けた。このため防災都市構想が策定され、国道191号と七尾町とを結ぶ路線が都市計画決定された。道路整備事業は昭和59年8月から始まったが、この道路が縦断する三宅御土居跡の史跡としての重要性が問われ、工事はいったん中断した。

益田市では、三宅御土居跡の実態解明に着手する一方、解決策を模索し、平成6年に関係者をはじめ市民の合意を得て「益田市歴史を活かしたまちづくり計画」を策定した。

これに基づき、県道益田種三隅線は三宅御土居跡の遺跡を保護する工法を用い、遺構活用広場も併設して整備された。また、中世城下町の遺構といわれる暁音寺鍵曲がりも保全し、平成14年3月に全線が歴史の道「七尾城通り」として完成した。

この一連の経過の中で、益田市は豊かな歴史と快適な現代社会とが共存する“中世文化の薫るまち”の実現をめざすことになった。

そして、平成16(2004)年に益田市、美都町、匹見町が合併して現在の益田市となり、同年9月には益田氏城館跡が国史跡に指定された。翌年には、島根県芸術文化センター「グラントワ」が開館し、益田はもとより、島根県西部の芸術・文化の発信拠点となった。平成24(2012)年には、益田の歴史文化に関する情報発信と調査研究を一層推進していくために益田市歴史文化研究センターが設置された。

平成26(2014)年には中世の湊町中須東原遺跡が国史跡に指定され、益田市合併10周年を記念して、関ヶ原の戦い以来400年ぶりに「益田家文書」が里帰りし、「益田家文書に見る中世益田の館・城・湊」展が開催されている。また、平成29(2017)年には、益田氏をはじめとする石見の戦国武将の盛衰や文化を、美術品や文化財から紹介する「石見の戦国武将」展が開催された。

2-2-2 中世の益田氏

益田氏城跡跡は、益田氏が中世に本拠とした館と城の遺跡であることから、ここでは中世の益田氏について詳しく述べる。

御神本一族の分出

平安時代末に石見国司として藤原(御神本)国兼が石見国衙に赴任したという。源平の合戦に際して藤原(御神本)兼高はいちはやく源氏方に味方し、元暦元(1184)年には石見国の押領使に任命されて警察権を与えられ、石見全域に及ぶ所領を認められた。その後、兼高の子や孫の代に、一族は益田、三隅、周布、福屋などの各氏に分かれ、彼等は同じ一族という意識を持ちつつも、それぞれが独立した領主として活動するようになった。

鎌倉後期の益田氏当主兼弘は、益田川中流域の山道地域(現在の美都町仙道)を本拠としていたと推定されている。

南北朝の動乱と益田兼見の台頭

南北朝時代、益田氏は北朝方の石見守護上野頼兼に従い、南朝方の石見国司日野邦光に従う高津氏・三隅氏などと抗争を続けた。この動乱期に、益田氏は本来の嫡流であった兼世の系統が没落し、庶流であった兼見がこれに取って代わった。

兼見は益田氏惣領としての地位を確立し、益田の平野部の大半を支配下に収めた。応安4(1371)年には大檀那として釈迦如来坐像を崇観寺に寄進、同7(1374)年には万福寺を創建した。また、兼見は崇観寺を諸山に、万福寺を本道場にしたという。永徳3(1383)年、兼見は子孫等が遵守すべき置文を作成し、惣領制のもとに一族を団結させ、崇観寺、万福寺や安国寺(浜田市)などの寺院、瀧蔵権現(染羽天石勝神社)や御神本大明神(美都町仙道)を大切にすることを記している。兼見によって、中世の益田と益田氏の基礎が築かれた。

室町幕府・大内氏と益田氏の動向

室町時代には、益田氏は室町幕府や石見守護山名氏、周防・長門の大名大内氏と関係を深め、石見の有力武士団として活躍した。一方、同じ御神本一族の三隅氏・福屋氏・周布氏や、津和野の吉見氏とは、



図2-5 御神本国兼像
(雪舟の郷記念館所蔵)

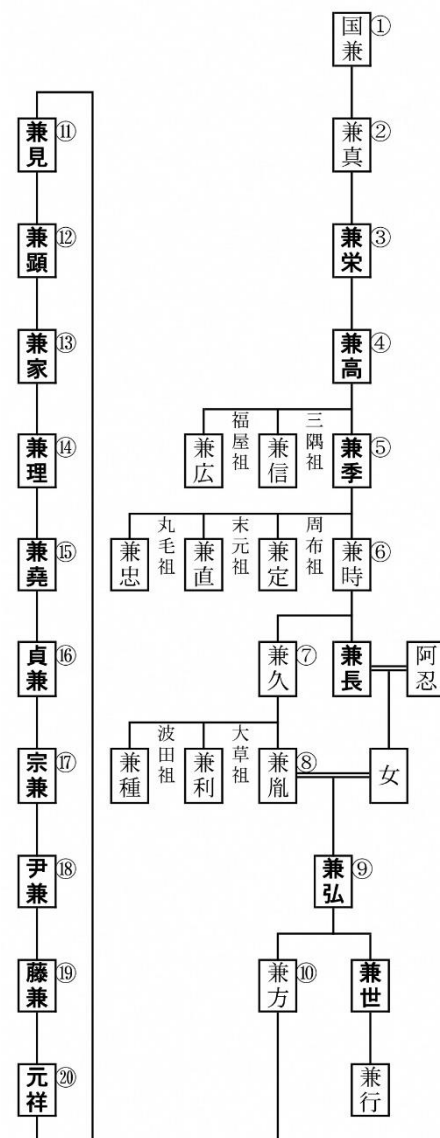


図2-6 益田氏家系図

(数字は一般的な代数をあらわし、ゴシックは史料により惣領であることが確認できる人物を示す。)

しばしば対立することもあったが、時には盟約を結ぶなどして領主連合が形成され、次第に益田氏はその盟主としての地位を得ることになった。

兼堯は、父兼理と兄の死によって幼くして家督を継いだ。当時の益田氏は東の三隅氏、西の吉見氏との関係が悪く、兼理の代にはなんらかの内紛があったようで、応永33(1426)年に大草・波田・符・乙吉・山道といった庶子家を追放するなど、内憂外患の状態にあった。永享7(1435)年に、寺戸禅幸ら106名の一族・家臣が、兼堯を惣領として忠誠を尽くすと誓った。ここには兼理が追放した大草・波田・符氏らも見え、過去の遺恨を捨て一族・家臣が結束して益田氏の危機にあたらうとしたと考えられる。その後、兼堯は室町幕府から益田氏領の安堵(保証)を受け、幕府及び石見守護山名氏の周旋により三隅氏・吉見氏との関係改善を進めるなど、幕府・守護との関係を深めることで、益田氏の安泰を図ろうとした。そのかわり、兼堯は幕府のための合戦に何度も出陣している。一方で、阿須那(邑南町)を本拠とする高橋氏と盟約関係を結んだり、大名大内氏との関係を深めたりするなど、幕府・守護との関係だけにとどまらない動きも見せている。

また、この頃の益田は山口の大内氏の影響を強く受け、兼堯は雪舟を益田に招いた。雪舟は、万福寺や崇観寺に庭園を築き、兼堯の肖像画を描いた。こうしたことにより室町文化が益田に花開いた。

応仁・文明の乱に際して、大内政弘は西軍方の主力として上洛するが、その伯父大内道頓(教幸)が東軍方から大内氏当主として認められ、東軍方として挙兵した。これに対して、政弘方の陶弘護が道頓を攻撃し、道頓が津和野の吉見氏らを頼ると、弘護と姻戚関係(兼堯の娘が弘護の妻)にあった貞兼は弘護と連携して道頓を九州に没落させた。これにより、文明10(1478)年に、貞兼は長門国の大井・川島(山口県萩市)を預けられている。宗兼は大内氏に従って上洛し、足利義植(最初は義尹)・大内義興政権を支えた。これにより、「大外様衆」という大名に次ぐ地位として遇され、尹兼は将軍から偏諱を与えられ、刀剣・小袖などを賜った。京都国立博物館所蔵の国重要文化財「太刀銘成高」及び東京国立博物館所蔵の国重要文化財「白茶地桐竹文綾小袖」は、この時与えられたものという。また、大内氏は上洛にあたって、石見の領主の関係改善を進め、これにより益田氏は石見領主連合の盟主的な立場を占めるようになった。



図2-7 国重要文化財 益田兼堯像
(雪舟の郷記念館所蔵)

戦国の争乱と海洋領主的性格

戦国時代になると、益田氏は大内氏重臣陶氏との関係をより深め、天文20(1551)年に陶晴賢(最初は隆房)が主君の大内義隆を滅ぼし、大内氏の実権を握ろうとすると、藤兼はこれに積極的に協力した。天文22(1553)年、益田氏・陶氏は共に敵対関係にあった吉見氏を攻撃したが、安芸国の毛利元就が反陶氏の態度を鮮明にすると吉見氏と和睦した。藤兼は三

隅氏を攻撃し、天文24(1555)年頃には三隅沿岸部や三隅氏の本拠高城(浜田市三隅町)を攻略したと推定される。また、長門国須佐・江崎(山口県萩市)などにも勢力を伸ばした。

しかし、弘治元(1555)年の厳島合戦で、晴賢が毛利元就に敗れて戦死し、さらに同3(1557)年に毛利氏が大内氏を滅ぼして、周防・長門を支配下に収めると、陶氏と関係の深かった益田氏は毛利氏・吉見氏との緊張を高めた。実際に吉見氏は永禄5(1562)年に須佐などを攻略し、田方川を除く長門国阿武郡(現在の山口県北部)は吉見氏の支配下となった。こうした中、藤兼は吉川元春を介して毛利氏との和睦を進め、永禄6(1563)年に正式に講和した。

このような益田氏の活動の背景には、豊富な地域資源と交易による経済力があつたと思われる。都茂鉱山は、その下流に大年ノ元遺跡(室町時代の銅精錬場)が発見されたことにより、中世においても稼働していたと考えられる。また、天正6(1578)年に宗像大社(福岡県宗像市)が遷宮を行った際、材木が益田で調達されている。これらのことから、中世の益田は銅や材木といった地域資源に恵まれており、これらの地域資源は益田川・高津川・匹見川などを使って川下しされ、河口域の港から国内外へと輸出されたと思われる。益田氏はこうした交易に積極的に関わっていたと思われ、藤兼は長門国見島(山口県萩市)を領有して朝鮮との交易を行っていた可能性が指摘されており、実際に永禄11(1568)年に毛利氏の本拠吉田郡山城(安芸高田市)を藤兼・元祥父子が訪れた際には、毛利氏に朝鮮半島の虎皮を贈ったり、北方産の昆布・数の子などの料理を振る舞ったりしている。これらのことから、益田氏はその「海洋領主的性格」が指摘されている。

近世への転換と益田元祥

安土桃山時代には、元祥が中世から近世への移行に積極的に対応しようとした。元祥は天正11(1583)年に三宅御土居の大改修を行い、東西190m、南北110mの敷地の東西両側に土塁を構え、周囲を堀で囲んだ大規模な館を築いた。また、豊臣政権下の毛利氏内でも重要な地位を占めるようになった。

慶長5(1600)年の関ヶ原の戦いに敗れた毛利氏が長門国に滅封されると、元祥はこれに従って長門国須佐(山口県萩市)に移り、以後益田氏は萩藩毛利氏の永代家老家となった。益田氏が去ると、益田市域は幕府領、津和野藩領、浜田藩領に分割され、中世の終焉とともに城下町としての役割を終え、近世在郷町として発展した。

なお、益田家に伝来した約1万8千点余りの文書「益田家文書」は、質・量ともに全国屈指の文書群である。特に、中世の史料800点余りは、中世の面影を今も伝える景観や遺跡などとともに、中世を復元できる貴重な学術研究資料となっている。



図 2-8 国重要文化財 益田元祥像
(提供：島根県立石見美術)

表2-1 益田の歴史年表

	年号	西暦	益田市関連	日本国内	
原 始	(旧石器時代)		匹見でナイフ形石器が使われる(新槇原遺跡)		
	(縄文時代)		上ノ原遺跡・蔵屋敷田遺跡が営まれる	土器が出現する	
			匹見に九州、瀬戸内との交流拠点となる集落が現れる(中ノ坪遺跡、石ヶ坪遺跡)		
			匹見で配石遺構を伴う遺跡が営まれる(水田ノ上遺跡、石ヶ坪遺跡、ヨレ遺跡、イセ遺跡)		
	(弥生時代)		安富に安富王子台遺跡が営まれる	北部九州に水田稲作が伝わる	
			浜寄・地方遺跡で水田耕作が始まる		
			安富に環濠集落が営まれる(羽場遺跡)		
			専光寺脇遺跡で貼石墳丘墓が築かれる		
古 代	(古墳時代)		四塚山古墳に三角縁神獣鏡が副葬される	各地に前方後円墳が築かれる	
			大元1号墳が築かれる		
			スクモ塚古墳が築かれる		
			小丸山古墳が築かれる		
			鶴の鼻古墳群、北長迫横穴群など群集墳、横穴墓が築かれる		
		645		大化の改新	
		694		藤原京に遷都	
			柿本人麿が活躍する		
		和銅3	710		平城京に遷都
		神亀2	725	瀧蔵権現(染羽天石勝神社)が創建される	
		延暦13	794		平安京に遷都
中 世			仙道に粟島原遺跡、東仙道土居遺跡が、益田川河口域に沖手遺跡が営まれる		
	永久年間	1113 ～ 1118	藤原(御神本)国兼、石見国司として赴任する		
	元暦元	1184	藤原(御神本)兼高、源平の戦いに源氏方として軍功をあげる		
	文治元	1185		鎌倉幕府成立	
	建久3	1192		源頼朝、征夷大將軍となる	
	建久年間	1190 ～ 1199	藤原(御神本)兼高、益田に移り、益田氏と改める		
	(北朝/南朝) 正慶2/元弘3	1333		鎌倉幕府滅亡	
	建武3/延元元	1336	三隅氏、七尾城北尾崎木戸を急襲する	室町幕府成立	
	暦応元/延元3	1338		足利尊氏、征夷大將軍となる	
	暦応3/興国元	1340	益田兼見、豊田城を落とす		
	暦応4/興国2	1341	益田兼見、稲積城、高津城を落とす		
	応安4/建徳2	1371	益田兼見を大願主に崇観寺本尊として釈迦如来坐像が製作される		
	応安7/文中3	1374	益田兼見を大檀那として万福寺が建立される		
	永徳3/弘和3	1383	足利義満、益田兼見の所領を安堵(保証)する 益田兼見、置文を作成する		

	年号	西暦	益田市関連	日本国内
中 世	明德3/元中9	1392		南北朝統一
	明德4	1393	大内義弘、益田兼家に益田荘地頭職を返還する。その際、要害の破壊が命じられる	
	永享3	1431	益田兼理、大内盛見に従い九州に出陣中、戦死する	
	応仁元	1467	益田久直ら朝鮮と交易する	応仁・文明の乱(～1477)
	文明2	1470	益田貞兼、陶弘護と協力して大内道頓(教幸)方と戦う	
	文明6	1474	足利義政、益田貞兼に高津など七郷の地頭職を安堵する	
	文明11	1479	東光寺僧竹心周鼎、雪舟筆の益田兼堯像に着賛(描かれている人物を讃える文章)する。この頃、雪舟、崇観寺、万福寺に庭を築く	
	永正5	1508	益田宗兼、大内義興に従って上洛する	
	天文20	1551	益田藤兼、陶晴賢の下剋上に協力し、周布氏らと与同させる	大内義隆、家臣の陶晴賢に攻められて自刃
	天文22	1553	陶氏、益田氏、津和野の吉見氏を攻撃する	
	天文24	1555		毛利氏、厳島合戦で陶晴賢を敗死させる
	弘治3	1557	益田藤兼、毛利氏と和睦交渉を進める	毛利氏、大内義長を自害させ、防長両国を征服する
	永禄5	1562	益田藤兼、毛利氏に呼応して、三隅氏の板井川要害を攻撃する	毛利氏、尼子勢を放逐して石見を制圧
	永禄6	1563	益田藤兼、毛利氏と正式に講和する	
	永禄11	1568	益田藤兼・元祥父子、安芸吉田郡山城の毛利元就のもとへ挨拶に出向く	織田信長が足利義昭を奉じて上洛する
	元亀元	1570	益田藤兼、元祥に家督を譲る	
	天正元	1573		室町幕府滅亡
	天正10	1582		本能寺の変 毛利輝元、羽柴秀吉と講和
	天正11	1583	益田元祥、三宅御土居を大改修し土塁・館を築く 益田藤兼・元祥、七尾城を下城する 益田藤兼・元祥、染羽天石勝神社(瀧蔵権現)本殿再建	
	近 世	慶長5	1600	益田元祥、伊勢などに出陣 元祥、関ヶ原の戦いの後長門国須佐へ移る 坂崎直盛、備前国岡山より津和野3万石にて移封され、津和野藩が立藩する
慶長8		1603		徳川家康、征夷大將軍となり、江戸に幕府を開く
慶長9		1604	毛利輝元、山口より萩へ移る 益田・福原両家が永代家老家となる	
慶長19		1614	益田家旧臣木村祐光、三宅御土居跡に泉光寺を創建する	大坂冬の陣
元和2		1616	坂崎家が断絶 津和野藩、高津川河口に高津港をつくる	
元和3		1617	亀井政矩、因幡国鹿野より津和野4万3千石に移封される	
元和5		1619	古田重治、伊勢国松坂より浜田5万4千石にて移封され、浜田藩が立藩する	
慶安2		1649	松平康映、播磨国宍粟より浜田5万石に移封される	
延宝9		1681	高津柿本神社、高津松崎より現在地へ移される	
宝永4		1707	高津村庄屋長嶺嘉左衛門、高津湖水滝ノ山切抜水懸樋(蟠竜湖疎水工事)を完成	

	年号	西暦	益田市関連	日本国内
近世	享保8	1723	柿本神社千年祭、正一位が贈られ御製短冊が奉納される	
	享保14	1729	中須村浜崎の地から石造十三重層塔が掘り出される	
	宝暦9	1759	本多忠敬、下総国古河より浜田に移封される	
	明和6	1769	松平康福、再び浜田藩に移封される	
	文化3	1806	伊能忠敬、長門から石見に入り測量を行う	
	天保7	1836	松平斉厚、上野国館林より浜田に移封される	
	慶応2	1866	石州口(扇原関門)の戦いにおいて、岸静江戦死	第2次幕長戦争
	慶応3	1867		徳川慶喜、大政奉還する 王政復古の号令
	明治元	1868		鳥羽伏見の戦い
近代	明治2	1869	旧幕府領・旧浜田藩領に大森県を置く	版籍奉還
	明治3	1870	大森県を浜田県に改称する	
	明治4	1871	石見国全体を浜田県とする	廃藩置県
	明治9	1876	浜田県を島根県に合併する	
	明治27	1894		日清戦争(~1895)
	明治37	1904		日露戦争(~1905)
	大正12	1923	山口線津和野-石見益田間が開通し、石見益田駅が開業する 山陰本線三保三隅-石見益田間が開通する	
	昭和12	1937		日中戦争はじまる
	昭和16	1941		太平洋戦争(~1945)
現代	昭和27	1952	益田町が市制に移行、益田市になる	
	昭和31	1956	匹見村が町制に移行、匹見町になる	
	昭和32	1957	美都村が町制に移行、美都町になる	
	昭和38	1963	山間部が豪雪に見舞われる	
	昭和45	1970	三宅御土居跡が県史跡に指定される	
	昭和47	1972	七尾城跡附妙義寺境内が県史跡に指定される	
	昭和58	1983	歴史民俗資料館が開館 県西部を中心に集中豪雨、益田市も甚大な被害を受ける	
	平成2	1990	益田市が国重要文化財「益田兼堯像」を購入 雪舟の郷記念館が開館 三宅御土居跡・七尾城跡の発掘調査がはじまる	
	平成5	1993	県営石見空港が開港	
	平成6	1994	「益田市歴史を活かしたまちづくり計画」策定 秦記念館が開館	
	平成14	2002	三宅御土居跡部分を通る道路整備が完了する(県道益田種三隅線の一部)	
	平成16	2004	沖手遺跡の発掘調査がはじまる 益田氏城館跡が国史跡に指定される 益田市・美都町・匹見町が合併し、益田市となる	
	平成17	2005	中須西原・東原遺跡が発見され、発掘調査がはじまる 島根県芸術文化センター「グラントワ」が開館	
	平成19	2007	「史跡益田氏城館跡保存管理計画」策定	
	平成26	2014	中須東原遺跡が国史跡に指定される 益田家文書里帰り展「益田家文書に見る中世益田の館・城・湊」開催	
平成29	2017	島根県、益田市、東京大学史料編纂所の共同研究の成果発表として「石見の戦国武将」展開催		

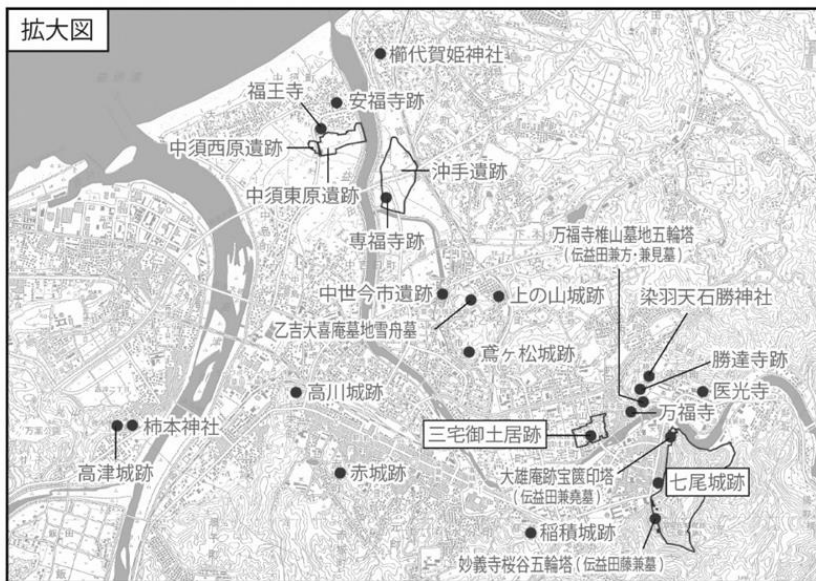
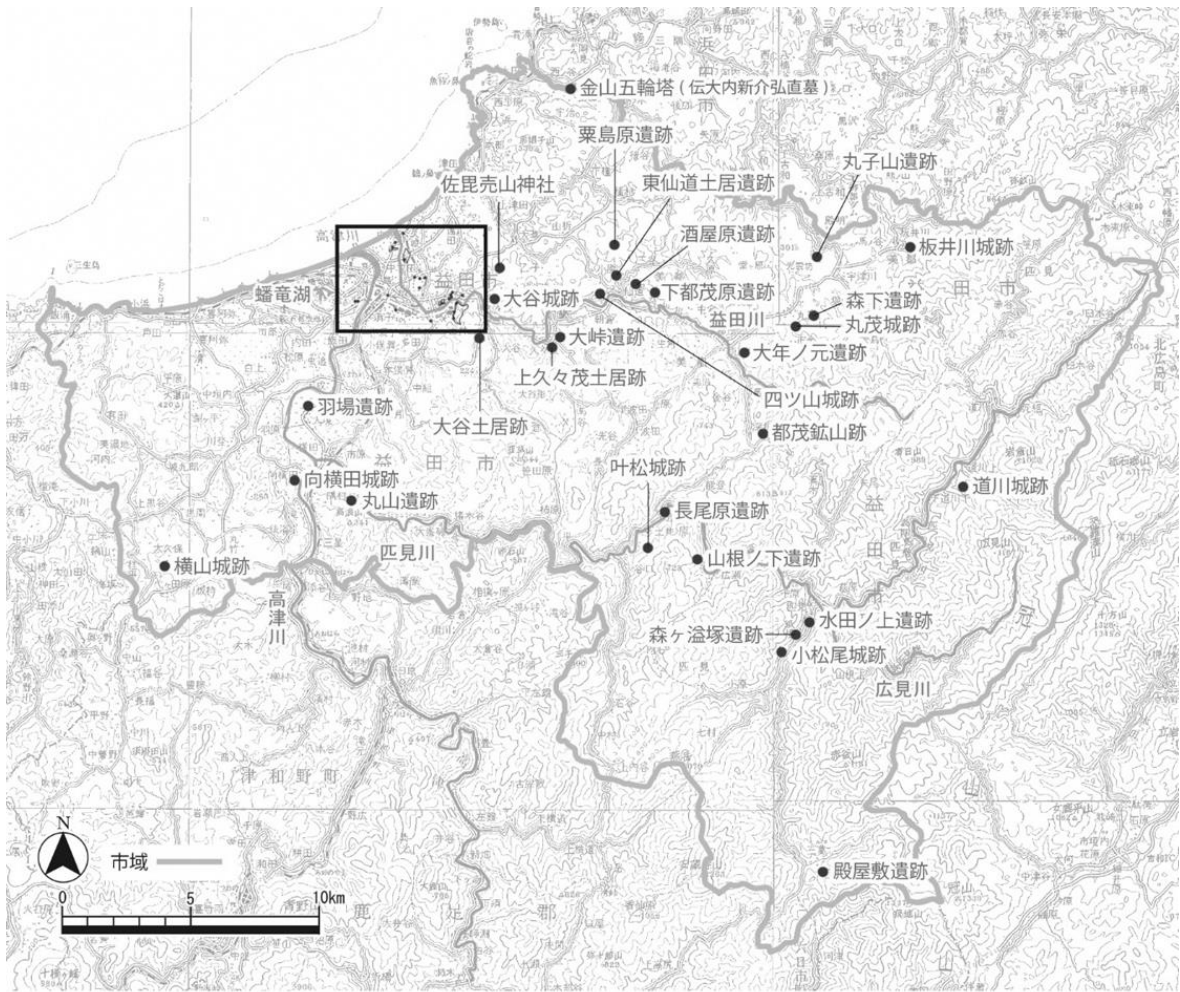


図2-9 益田市域の主な中世遺跡等

2-2-3 益田氏城館跡に関わる歴史文化

益田市には、中世に関わる歴史文化が数多く残されている。

石見国を代表する有力武士団の益田氏が本拠とした益田本郷地域(現在の益田地区)には、山城の七尾城と平地に築かれた居館の三宅御土居を中心に中世の遺跡や地割・地名、寺社、石造物などが数多く残り、これを取り巻くように市域全体に中世遺跡が点在している。

また、山陰地方では質・量ともに随一とされる「益田家文書」をはじめとして、「安富家文書」、「周布家文書」等の益田氏に関連する貴重な史料や、益田家が旧蔵していた絵画等多くの美術工芸品が市内外で所蔵されている。これらは中世史研究に欠かせない資料であるとともに、中世益田の歴史を裏づける資料でもある。



ここでは、その中から益田氏城館跡に関連すると考えられるものを取りあげる。



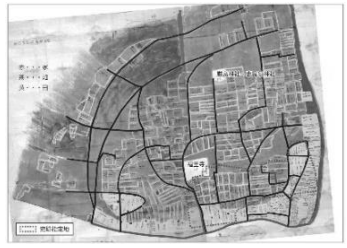
中世の歴史文化は、大きくは益田氏城館跡を中心とする「七尾城下町と周辺域」、港湾遺跡等が確認されている「高津川・益田川河口域」、銅山関連遺跡や鎌倉時代後期の益田氏本拠地などがある「高津川・益田川上流域」に分布している。このうち七尾城下町とその周辺域については【3-4 史跡周辺地域に残る中世の歴史文化、P68】で取りあげるため、これら以外の地域について述べるものとする。

(1) 高津川・益田川河口域


高津川・益田川の河口域には、交易・流通拠点として発展した中須東原遺跡をはじめとする複数の港湾遺跡や、古い歴史や伝承をもつ寺社、中世の名残を留める景観などが多く存在する。

表2-2 高津川・益田川河口域の歴史文化

名称	種別	概要等
<p>中須東原遺跡(中須町)</p> 	港湾集落跡	<p>中世港湾遺跡。 12～16世紀。 海岸砂丘の内陸側に立地。 道路によって区画された方形街区、汀線沿いに舟着場や荷揚げ場と考えられる礎敷き遺構、多くの鍛冶関連遺構を検出。 港を中心に展開した町の街区が良好な状態で残り、中世の港湾の成立と展開が確認できる。 隣接する中須西原遺跡は、本来中須東原遺跡と一体の港湾集落。</p> <p>◆国指定 平成26年3月18日指定</p>
<p>沖手遺跡(久城町)</p> 	港湾集落跡	<p>11世紀後半から12世紀にかけて成立・発展した、推定範囲86,000㎡の大規模な港湾集落跡。 幅4～6mの道路等によって複数のブロックに区画され、区画内で掘立柱建物跡、井戸、墓などの遺構が確認されている。 成立段階から一定の規格性をもち、道路を骨格とした集落全体の地割が行われていたことがうかがえる。</p>

名 称	種別	概 要 等
<p>中世今市遺跡(乙吉町)</p> 	市町跡	<p>益田川の支流今市川の右岸に所在。 16世紀に入って衰退し始めた中須東原・西原遺跡に代わって築かれた港町。 船着場と市場の機能を備え、益田氏の戦費や軍事物資を調達するために特権商人が居住したと推定される。石垣の一部が市指定史跡。</p> <p>中世今市船着場跡 今市川に沿って延長約100mの護岸状石垣が築かれる。 ◆市指定 昭和56年2月23日指定</p>
<p>安福寺跡(中須町)</p> 	寺跡(伝承地)	<p>万寿3(1026)年の地震・大津波で流失したと伝承される五福寺の一つで、中須にあったといわれる。 跡地に小庵が再建されたというが、その後の応安7(1374)年に、益田本郷に移転され、寺名を万福寺に改めて再建された。 福王寺石造十三重塔は、享保14(1729)年の大洪水の際に、中須浜崎の寺屋敷と呼ばれる寺跡推定地から掘り出されたもの。</p>
<p>平田遺跡(中吉田町)</p> 	集落跡	<p>中世の全時期を通じて営まれた集落跡。 近くには、五輪塔と宝篋印塔の残欠が残る。</p>
<p>中世以来の景観を残す地割や土地利用</p>  <p>(広島大学図書館所蔵)</p>	歴史的景観	<p>中須は江戸時代には中須村に属し、安永6(1777)年の村明細帳(右田家文書)では家数77戸、人口307人とある。明治初期の中須村地引図が残されているが、地引図と昭和20年代の土地利用図を比較しても、里道や田畑の区画等が近年まで引き継がれていたことがわかる。現在でも中須東原遺跡付近をみると、砂丘を貫く里道が北方の集落と連絡するなど、道路としての機能をそのまま受けついでいる。また、中須東原遺跡で発見された道路と考えられる溝状遺構の一部は、これら里道にも継承されたようで、中世以来の地割や景観を今に遺す。</p>
<p>高津川・益田川の河口域の寺社 専光寺(久城町)</p> 	寺院	<p>浄土真宗。本尊は阿弥陀如来。 1580年頃に開山慶祐が幕府領佐摩村栃畑谷(現在の大田市大森町)に創建。1700年前半頃に現在地へ移転される。</p>

名 称	種別	概 要 等
<p>高津川・益田川の河口域の寺社 大塚神社(中島町)</p> 	神社	<p>一時期、熊野松神社境内に移転奉斎されたが、昭和18(1943)年の水害により、最初の縁故地(現在地)に再建される。 主祭神は事代主神、大物主神。</p>
<p>熊野松神社(中島町)</p> 	神社	<p>寛永18(1641)年、熊野本宮より勧請されたと伝わる。 主祭神は伊邪那岐命、伊邪那美命。</p>
<p>大元神社(中吉田町)</p> 	神社	<p>天正3(1575)年に勧請されたと伝わる。 主祭神は国常立神。境内神社として、杵築神社(大国主命神)、神明神社(豊受姫神)、八坂神社(素戔鳴神)がある。</p>
<p>巖島神社(中須町)</p> 	神社	<p>江戸時代に浜田組七浦大年寄を務めた中須村大賀家の鎮守社であったものを中須村の氏神としたという。 豊漁、航海安全を護る神として信仰を集める。</p>
<p>恵毘須神社・大元神社(中須町)</p> 	神社	<p>巖島神社境内に祀られている。 一般的に漁業・商業をはじめ、広く生業の守護神として、信仰を集める。</p>
<p>櫛代賀姫神社(久城町)</p> 	神社	<p>中須一帯を見下ろす益田川右岸の久城丘陵上にある式内社。 神社由緒によると天平5(733)年に大浜浦に創建され、その後、久城の緒継浜へ移り、さらに万寿3(1026)年の大津波で社殿が流失したため現在地に移転したと伝わる。 中世には益田氏の庇護を受ける。 本殿は明和2(1765)年建築で、国の登録有形文化財。 神社の南方300mには明治初年に廃絶した別当寺真如坊跡がある。</p> <p>◆国登録 平成25年6月21日登録</p>

名 称	種別	概 要 等
福王寺(中須町)	寺院	浄土宗寺院。 かつての高津川・益田川河口域にあったと伝承される五福寺(専福寺・安福寺・福王寺・妙福寺・蔵福寺)の一つ。 現在の本堂は安政4(1857)年の再建。 境内には県指定の石造物や、元徳2(1330)年の年号が彫られた五輪塔の地輪、中世石塔が多く残る。
 福王寺石造十三重塔 	建造物	花崗岩製層塔。総高4.2m。 鎌倉時代後期。 ◆県指定 昭和38年7月2日指定

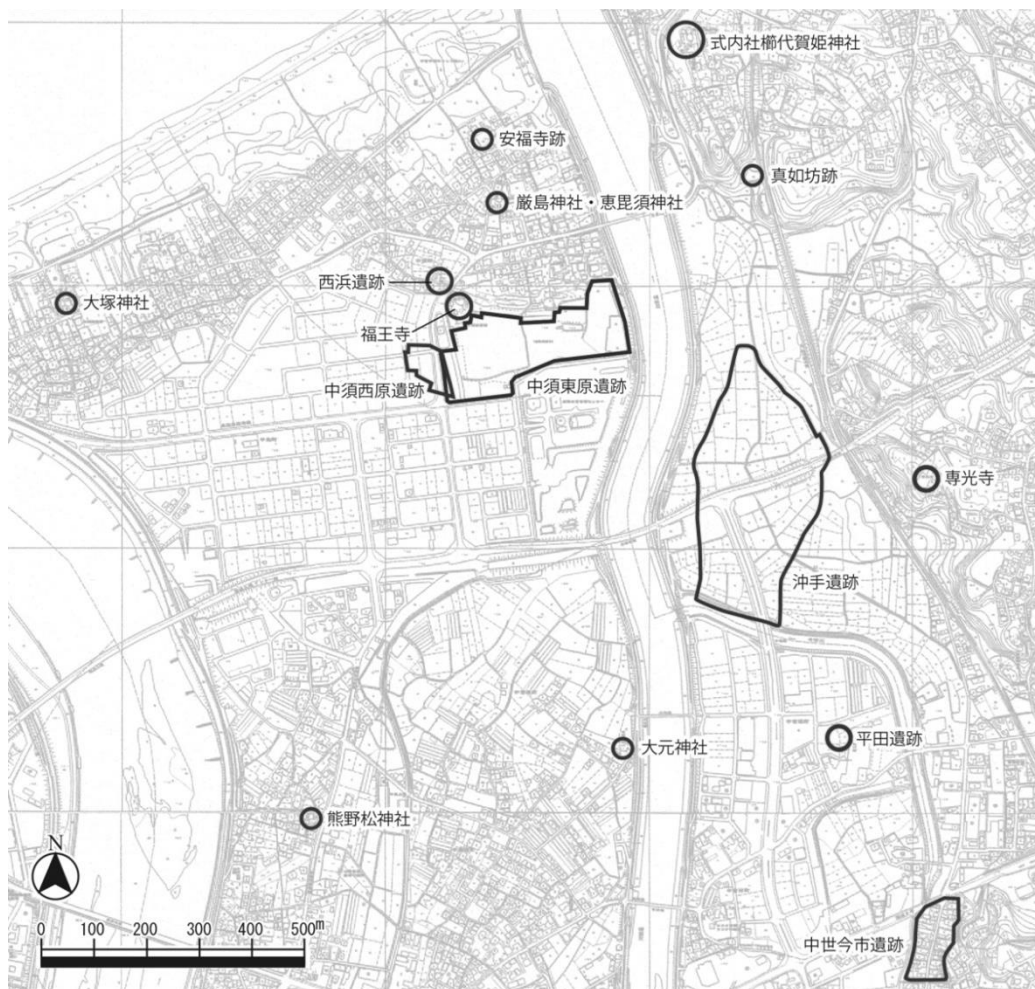








図2-10 高津川・益田川の河口域の主な中世遺跡と寺社

(2) 高津川・益田川上流域

益田氏一族の本拠が一時期置かれていた益田川上流域や、豪族居館跡等が確認されている高津川流域(匹見川上流等)にも重要な益田氏関連遺跡群がある。

表2-3 高津川・益田川上流域の歴史文化

名 称	種別	概 要 等
仙道地域中世遺跡群 東仙道土居遺跡 	墓	仙道地域は、鎌倉後期の益田氏が本拠を置いていたと推定される地域であり、益田氏の歴史上で重要な位置を占める。 ・遺構/集石墓 ・蔵骨器として褐釉四耳壺や常滑系壺が出土。 ・付近に館跡が推定される。 ・13～15世紀の在地領主の館。
酒屋原遺跡 	役所跡	・遺構/道路、柱穴 ・役所跡(8世紀後～9世紀初)から在地領主の拠点施設(11～14世紀)へ変遷。 ・円面硯などが出土。
下都茂原遺跡 	集落跡	・遺構/掘立柱建物、井戸、土坑 ・緑釉陶器、黒色土器などが出土。 ・9世紀末～13世紀の役人の居住集落。
栗島原遺跡 	墓	・遺構/土坑墓 ・12世紀末～13世紀初の小領主の墓。 ・同安窯青磁、白磁、湖州鏡などの副葬品。 栗島原遺跡出土品 ◆市指定考古資料 平成12年5月26日指定
四ツ山城跡 	城跡	・遺構/未調査のため不詳。 ・仙道氏の拠城か。 ◆市指定 昭和56年3月24日指定

名 称	種別	概 要 等
大年ノ元遺跡(美都町山本) 	集落跡	<ul style="list-style-type: none"> ・遺構/掘立柱建物、竪穴状建物 ・14～15世紀の銅製錬工房跡。 ・『日本三代実録』に記された丸山銅山の下流約3.5kmに立地。 ・周辺に「古市」「鍛冶や」などの地名が残る。
都茂鉦山跡(美都町山本) 	鉦山跡	<ul style="list-style-type: none"> ・遺構/未調査のため不詳 ・元慶5(881)年に「都茂郷丸山」で銅が採れたとして、中央から役人が派遣された(『日本三代実録』)。 ・1600年に幕府領となる。 ・1898～1901年の間、津和野の堀氏が経営。 ・昭和62(1987)年に閉山。
山根ノ下遺跡(匹見町広瀬) 	館跡	<ul style="list-style-type: none"> ・遺構/柱穴群、土坑 ・益田氏勢力下の在地領主の館か(14～15世紀前半)。 ・青白磁梅瓶や朝鮮陶磁碗などが出土。 <p>山根ノ下遺跡の和鏡 ◆市指定考古資料 平成16年10月1日指定</p>
殿屋敷遺跡(匹見町紙祖) 	館跡	<ul style="list-style-type: none"> ・遺構/柱穴群、土坑 ・安芸、周防に接する。 ・14世紀中頃～16世紀にかけての在地領主の居館跡。 ・朝鮮陶磁碗や東南アジア産瓶、豆板銀などが出土。 <p>殿屋敷遺跡と遺物 ◆市指定 平成10年2月19日指定</p>

2-2-4 指定文化財

益田市には原始・古代からの文化財が数多く残り、建造物2件、絵画3件、史跡3件、史跡及び名勝2件、天然記念物1件の計11件が国指定文化財であり、さらに24件の県指定文化財、96件の市指定文化財、10件の国登録文化財を有する。全141件の指定・登録文化財のうち、区分別では史跡(48件)が、時代別では中世(45件)の文化財が最も多い。この他に、旧「重要美術品等ノ保存ニ関スル法律」による認定重要美術品が1件ある。

表2-4 益田市の指定・登録文化財

種別・区分			指定等の区分					合計	
			国宝	重要文化財	国指定 (左記以外)	登録文化財	県指定		市指定
種別	有形文化財	建造物		2		10	3	5	20
		絵画		3			2	7	12
		彫刻					4	5	9
		工芸品						2	2
		書跡							
		古文書					3	7	10
		考古資料					1	5	6
		歴史資料						1	1
	無形文化財	工芸技術							
	民俗文化財	有形民俗文化財					2	2	4
		無形民俗文化財					2	11	13
	記念物	史跡			3		4	41	48
		名勝					1		1
		史跡及び名勝			2			1	3
		天然記念物			1		2	9	12
		特別天然記念物							
	合計				5	6	10	24	96
			11						

※7 「柿本神社御法楽御短冊」(認定重要美術品)

2-3 社会的環境

2-3-1 人口

平成30(2018)年3月末日現在の益田市の人口は47,200人、世帯数は21,409世帯である。人口の推移をみると、昭和60(1985)年の60,080人をピークに、それ以降減少に転じている。一方、世帯数は核家族化の進行、単身世帯や高齢者のみの世帯が増えていることにより増加傾向にある。年齢3区分では65歳以上の高齢人口が36.8%と、県全体の33.6%(ただし、県全体のデータは平成29年10月1日現在)を上回り高齢化が顕著である。また、地区別では吉田地区、高津地区、益田地区及び安田地区の4地区に人口が集中しており、全体の67.9%を占める。

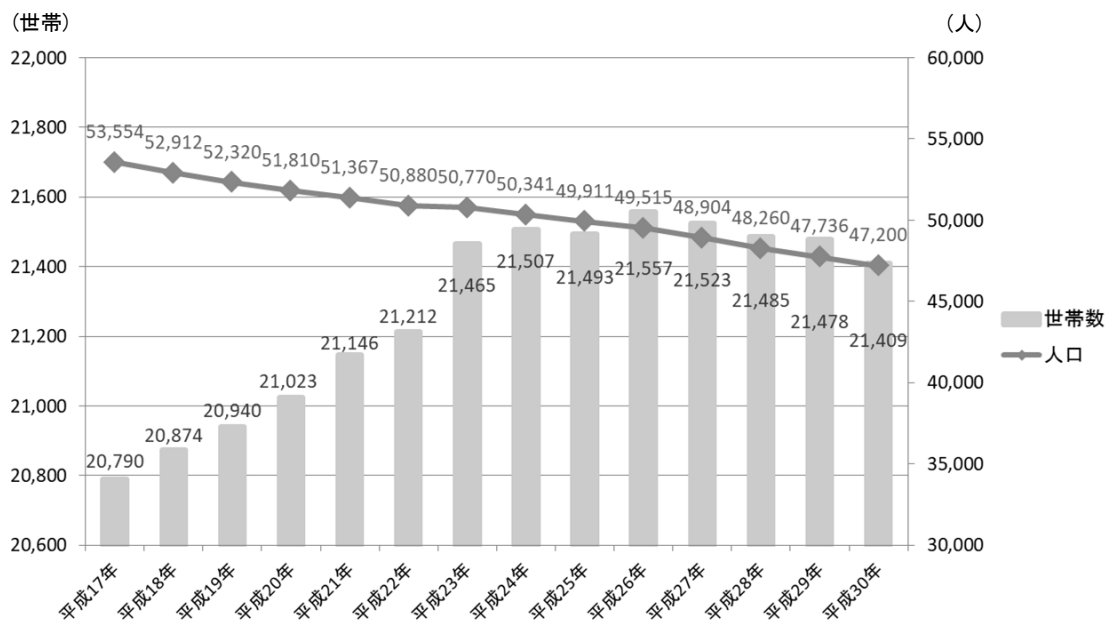


図2-11 人口・世帯数グラフ (平成30年3月末日現在)

表2-5 益田市年齢別人口

	15歳未満	15～64歳	65歳以上	総数
人口(人)	5,764	24,092	17,344	47,200
割合(%)	12.2	51.0	36.8	

(平成30年3月末日現在)

表2-6 益田市地区別人口

	益田地区	吉田地区	高津地区	安田地区	その他地区	(人)		市全体
						うち旧美都町	うち旧匹見町	
	5,832	14,084	8,365	3,796	15,123	1,962	1,119	47,200

(平成30年3月末日現在)

2-3-2 産業

平成28(2016)年6月1日現在の産業別就業者数では、第3次産業の事業所数・従業者数が最も多く、全体の70%以上を占め、次いで第2次産業(約20%)で、第1次産業である農林漁業の従業者数は全体の3%に満たない。業種別の従業者数を見ると、第3次産業の卸売業・小売業4,250人が最も多く、医療・福祉3,703人、製造業2,474人、建設業2,060人と続く。

なお、益田市では豊かな自然等地域資源を活かした第1次～第3次にわたる多様な産業の連携、付加価値を付けたブランドの確立等による産業の振興に取り組んでいる。

表2-7 産業大分類別事業所数及び従業者数

	第1次～第3次 産業総数	第1次産業		第2次産業				第3次産業										
		農林漁業	鉱業	建設業	製造業	電気・ガス・熱供給・水道	情報通信業	運輸業・郵便業	卸売業・小売業	金融業・保険業	不動産業・物品賃貸業	宿泊業・飲食サービス業	医療・福祉	教育学習支援	複合サービス業	学術研究・専門・技術サービス	生活関連サービス業・娯楽業	サービス業
事業所数(所)	2,590	51	7	250	140	4	20	53	674	50	110	318	217	67	50	110	269	193
従業者数(人)	20,074	588	45	2,060	2,474	129	137	839	4,250	494	296	1,559	3,703	449	340	576	860	1,275

(総務省「平成28年経済センサスー活動調査」)

2-3-3 土地利用

益田市の総面積は733.19km²で、島根県の総面積の約1割を占める。面積の大半が林野からなり、特に美都地域、匹見地域では90%近くを山林が占めている。平成30(2018)年の地目別面積をみると、主に平地に展開する田・畑・宅地は全体の約7%である。

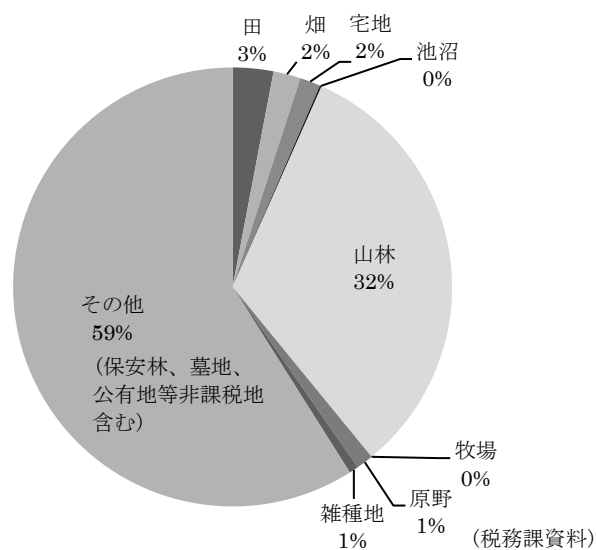


図2-12 地目別面積比

表2-8 地目別面積 (km²)

田	21.94
畑	14.67
宅地	11.14
池沼	1.01
山林	237.81
牧場	0
原野	9.23
雑種地	5.01
その他	432.38
総計	733.19

(平成30年1月1日現在)

2-3-4 道路・交通

益田市域の道路網は、主要幹線道として山陰地方を東西に結ぶ国道9号をはじめ、山口県下関市から広島県広島市に至る国道191号、益田市内で国道9号から分岐し匹見川に沿って広島県廿日市市方面に連絡する国道488号があり、これら国道に地域幹線道である県道や市内各所を結ぶ市道が接続している。

また、周辺諸都市間の時間短縮や交通拠点へのアクセス強化等による地域間の連携強化、交流の推進を目的として整備が進められている山陰道(高速自動車国道及び一般国道の自動車専用道路)では、益田市域において三隅・益田道路(三隅IC-遠田IC)、益田道路(遠田IC-須子IC)が国道9号のバイパスとして整備が進められている。このうち、遠田IC-久城IC及び高津IC-須子IC間が開通し、益田道路の未開通区間の久城ICと高津IC間は県道久城インター線が整備されている。なお、全長380kmに及ぶ山陰道の整備は、一部区間で事業未着手区間等もあり、全体としては完成に至っていない。特に、山陰の東西を結ぶ唯一の幹線道路である国道9号は代替路となる幹線道路が無く、渋滞や緊急時の輸送道路確保等が課題とされており、早期の高規格道路の整備・完成が待たれている。

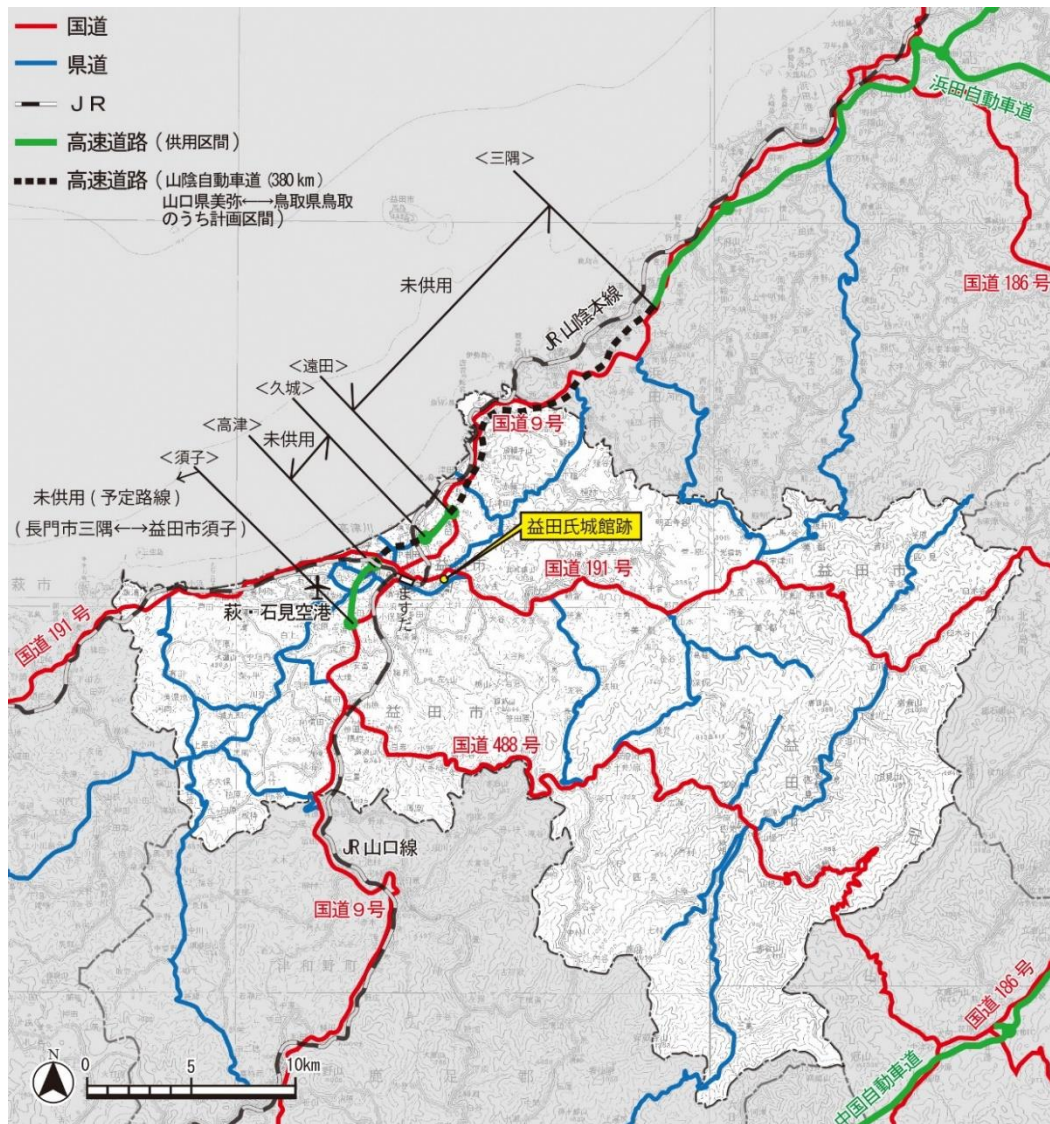


図2-13 益田市の交通網図(1)

鉄道は市内中心部にあるJR益田駅が山陰本線と山口線の乗換駅となっている。山口線は山陽本線・山陽新幹線駅である新山口駅方面と連絡する路線で、津和野ー山口間を走るSLやまぐち号がよく知られている。益田駅を通る特急列車は、新山口方面が1日3往復、米子方面が1日4往復運行している。

また、益田市は市街地近くに萩・石見空港を有しており、1日2往復の東京便と夏期限定で1日1往復の大阪便が運航している。よって、島根県西部と山口県北部の空の玄関口としての役割を担っている。

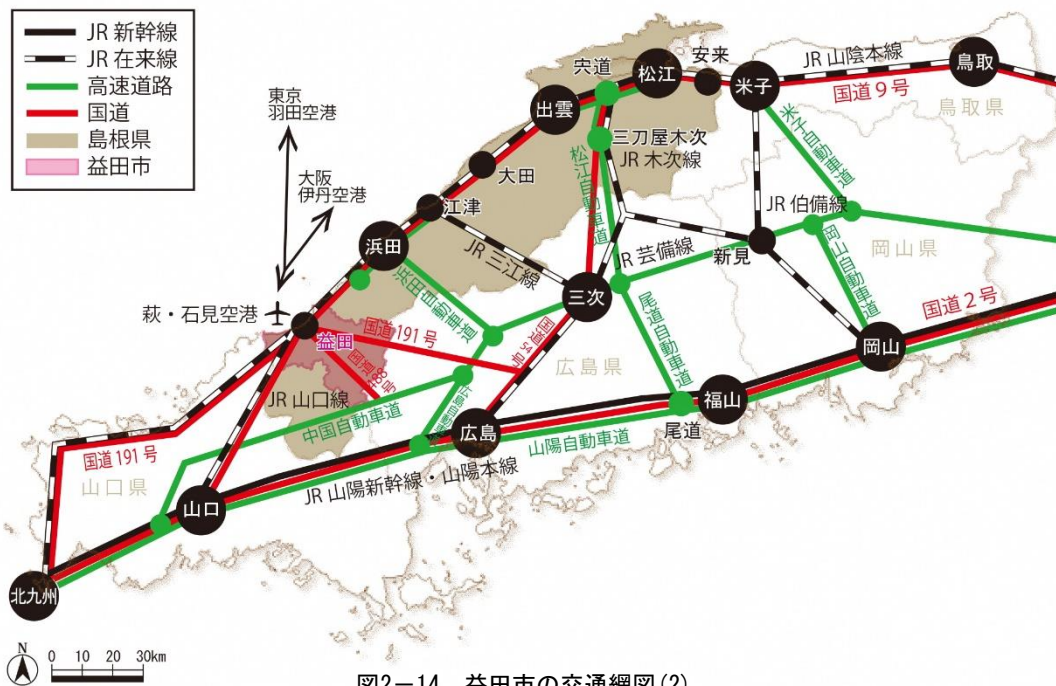


図2-14 益田市の交通網図(2)

2-3-5 観光資源

益田市は豊かな自然に恵まれ、本市を流れて日本海に注ぐ高津川は平成18年から6度日本一に選ばれた全国屈指の清流で、益田ブランドの鮎を求めて全国各地から多くの釣り人が訪れている。また、変化に富んだ海岸線は岬も多く、年間を通して釣りを楽しめるほか、唐音からおとの水仙公園は日本海を背景に市花である日本水仙200万株を見ることができる。

中世には地方豪族益田氏の本拠地として栄えた当地には益田氏ゆかりの史跡が多く、益田氏城館跡や、益田氏の招きによってこの地で晩年を過ごした室町中期の画聖雪舟の作といわれる庭園(医光寺・万福寺)等が残る。また、万葉集の歌人柿本人麿の生誕・終焉地とされ、人麿を祀る高津柿本神社や生誕の地と古くから語り継がれる戸田柿本神社がある。これら本市ゆかりの人物を顕彰・記念する施設として、県立万葉公園や益田市立雪舟の郷記念館などが整備されている。蟠竜湖県立自然公園は砂丘によって形成された堰止湖を利用した公園で、万葉公園と一体的に利用されている。また、およそ28万枚の石州瓦で覆われた島根県芸術文化センター「グラントワ」は、島根県立石見美術館と島根県立いわみ芸術劇場の複合施設で、多様で質の高い芸術文化鑑賞の機会を提供している。

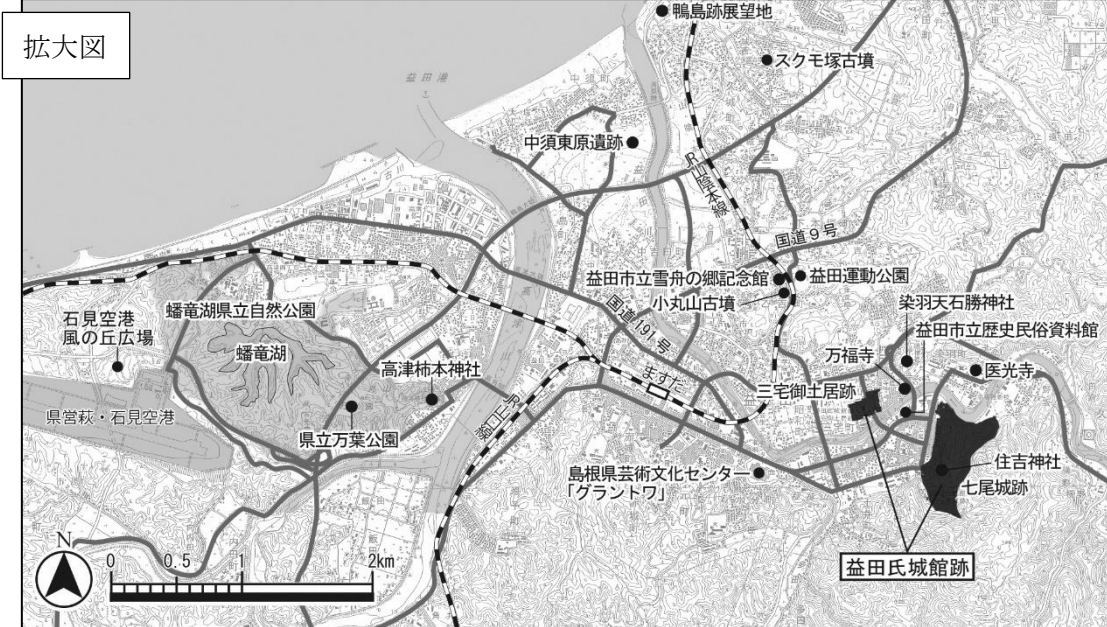
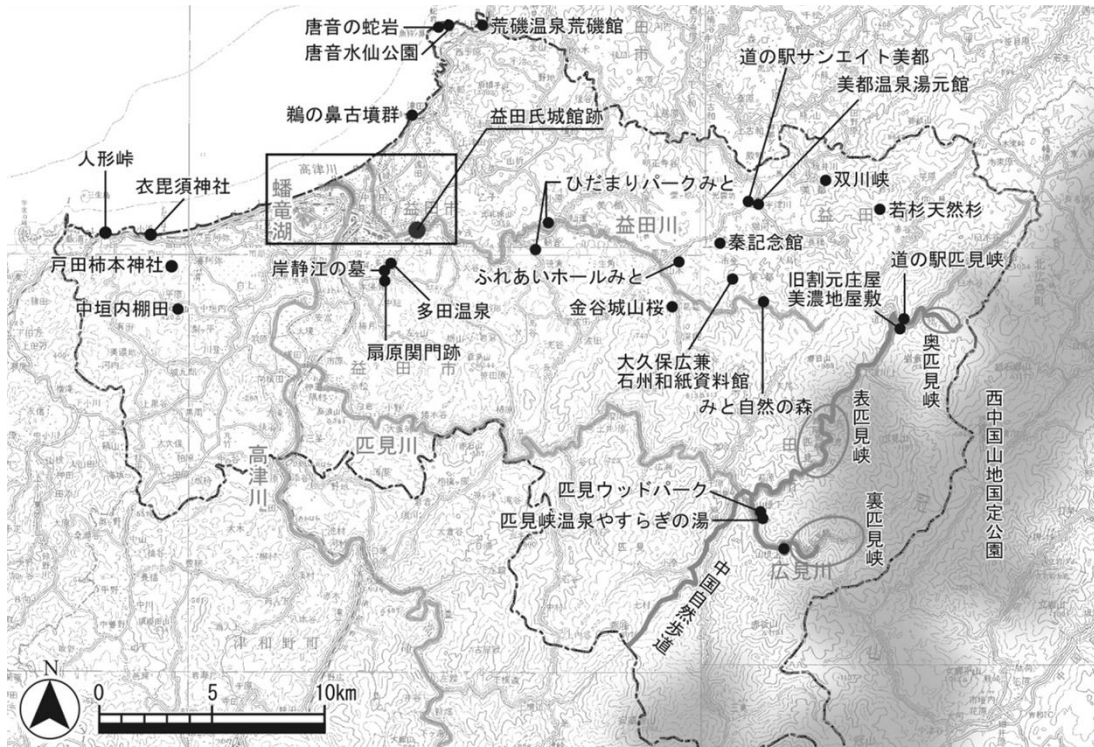


図2-15 観光資源分布図

「平成29年島根県観光動態調査」による平成29年の益田市の観光客数は961,464人で、主な集客施設としては島根県芸術文化センター「グラントワ」が377,383人、万葉公園が270,274人、美都温泉が96,426人などとなっている。周辺市町では浜田市が1,554,078人、津和野町が1,213,853人で、前者には石見海浜公園(520,250人)、後者には太鼓谷稲成神社(592,985人)などの集客施設がある。

益田市の交流人口の拡大にあたっては、広範な市域に点在する観光資源のネットワーク化や新たな資源の掘り起こしによる観光地としての認知度の向上に加え、周辺市町を訪問する観光客の周遊の促進が課題となっている。